

社会学理論 (Principles of Sociology) 教養学部冬学期 金曜3限 2010年11月26日 授業の内容

社会の原理はどのようなものかを考え、それに基づいて「The times of Harvey Milk」に関する課題テーマを再び考える。

★普通のことを自明視するメカニズム：同性愛者を「普通の人でない」とみてしまうのは、「男」と「女」の二つの世界の区分が一般化されていて、人間はそのなかでどっちかに属し、自分が好きになってもいい人と、いけない相手が最初から決められてしまっているからである。それは我々が住んでいる社会が共有している「認識上」の規範であり、「認識上の問題」であるため、なぜそうなのかを説明しにくく、それが当然の事でないかもしれないなどと疑問を抱いたり、気付くのが難しいのである。ゲイが最初自分の性的指向が分かった際に、同性の相手が好きな自分はおかしいのではないか、いけないのではないかと葛藤するのは、我々の社会に住んでいる成員が認識を共有していて、「普通のこと」とされるのが社会に存在しているからである。

「力」の分別：マックスウェーバーは権力を「他人の抵抗を廃して自己の意思を貫徹しうる可能性」と定義した。「その人がいなければしない行動」、「不利益」なこと、「イヤな事」をさせる可能性を持っていたら権力といえる。また「多数」の力、「普通」という形の力も存在する。様々な形で働いている「力」のなかで、必ず権力を行使されるのが「不利益」ではない例、必ず「多数」が権力を持つわけではなく、力が強いから多数になる例などが取り上げられた。

★functionalism vs conflict theory

機能主義が説明する社会の原理は、社会のコアを成すvalue consensus (価値共有) を中心に有機的に構成されている (integrated whole) 。‘what is desirable?’ に関する共有された価値が存在し、なにが「普通」であるかの社会のconsensusに基づいて生活している。「正しい」ものを共有して一緒にそれを志向しているため、社会の全体的なperformanceを高めていく「プラスサム」の社会である。それでは、機能主義は「対立」を説明できないだろうか？葛藤理論で議論される「対立」と説明の仕方が異なるだけで、機能主義の社会でも「対立」というものが存在しないわけではない。システムが維持される要件には①統合、つまり「望ましい」ものにしがたって資源を分配する原理以外にも②適応-外から入ってくる影響力、変化を受け入れて内部化する原理がある。「環境」というものが社会を取り囲んで存在し、人間の社会が生み出したものが「環境」になり、それが「変化の圧力」となって人間の社会システムに帰ってくるのである。つまり社会には外から対立の要素が入ってきて、その圧力によって、「新しい環境」に適応するため、新しい行動をする人々が登場する。新しいものを受け入れて認識を変えなければならないと思う人たちは最初は少数派として現れ、その際に、それを受け入れたくない人々(多数派)との価値の争いが生じる。今まで自分たちの「環境」と思っていなかったものが現れた際に、それを受け入れるための、認識論的な行動・価値を含む革新 (innovation) があらわれるが、それが一般に広がっていくのには時間がかかる。「革新」に反対する人々との対立を避けられないため、新しい認識が広がっていくその境界面には常に対立が存在し、社会は「対立」を経て「変化」を成し遂げる。それが機能主義理論の動的な説明に当たる。

葛藤理論の場合、中心にある一つの「力」 (political majority) によって、残りは周縁化され、正当性を奪われる (価値剥奪) 。葛藤理論では中心が常に一つであるゼロサムの社会である。しかし、センターが実際に存在するのかを説明するのは難しく、具体性がない。それでも、機能主義では説明できない社会の性質があり、葛藤理論は単純である分、社会を説明しやすい面を持っている。機能主義では中心がなく、多元主義であるため、全員が同じ確率で少数者になったり、多数者になりうる。しかし、実際に我々が観察できるマイノリティとマジョリティは、中心と周縁がそんなランダムで一瞬簡単に切替えられながら形成されるものではない。白人の中産階級のようにどのような場合でもマイノリティになりにくい人たちが常に存在すると見るほうが、より現実的である。そのように考えると、映画の中の同性愛者の「カムアウト」の社会的戦略は、マイノリティとマジョリティの対立を可視化することであり、Harveyは社会の原理を基本的にはconflict theoryの観点で考えたといえる。少数者と多数者の力関係において、マイノリティである同性愛者たちが中心から排除されているという認識からその対立の境界線をはっきりする戦略をとったといえる。

★課題：デュルケムの『自殺論』、またはその大体の内容を読んでください。